

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県病虫害防除所長

平成 25 年度病虫害発生予報第 4 号（7 月）について

このことについて、病虫害発生予報第 4 号を発表したので送付します。

予報第 4 号

なし黒星病の防除を徹底しましょう！

6 月 5 半旬の調査の結果、ナシ黒星病の発生が平年に比べて多くなっています。本病は降雨により伝染するため、梅雨明けまでは発生の増加に好適な気象条件になっています。

特に「幸水」は、7 月が果実に感染しやすい時期です。発病葉や発病果実は伝染源となるので、できるだけ取り除き、園外に持ち出し処分しましょう。

また、発病の多い園では追加防除を行うなど、薬剤散布を徹底しましょう。



黒星病に罹病した果実

早植え水稻の海外飛来性害虫の発生状況に注意しましょう！

本年は 6 月 20 日頃に、セジロウンカ・トビイロウンカとコブノメイガの飛来が認められています。飛来時期は平年よりやや早く、5 月末までに田植えが終了した早植え水稻のほ場で、この時期としてはやや多い飛来虫が確認されています。

今後、病虫害防除所が発生予察情報やホームページ等で、お知らせする飛来状況には十分注意するとともに、ほ場での発生状況の把握に努めましょう。

なお、発生が多い場合は、補正防除を行い被害防止に努めて下さい。



トビイロウンカの成虫



コブノメイガの成虫



コブノメイガ幼虫による被害葉

7月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病 (葉いもち)	並	並	並
	縞葉枯病	並	並	並
	ヒメトビウンカ	やや少	並	並
	セジロウンカ	やや多	やや多	やや多
	トビイロウンカ	やや多	やや多	やや多
	コブノメイガ	並	並	並
かんきつ	黒点病	並	並	並
	ミカンハダニ	少	少	少
なし	黒星病	やや多	やや多	やや多
	ナシヒメシンクイ	やや少	やや少	並
ぶどう	べと病	少	やや少	並
かき	炭疽病	やや少	やや少	並
	フジコナカイガラムシ	やや多	やや多	多
いちじく	アザミウマ類	少	少	多
果樹共通	チャバネアオカメムシ	少	—	少
茶	炭疽病	並	やや多	少
	もち病	少	やや少	少
	輪斑病	やや多	やや多	やや少
	チャノコカクモンハマキ	やや少	やや少	並
	チャノホソガ	やや少	やや少	少
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや少	やや少	やや少
	カンザワハダニ	少	並	並
	チャノキイロアザミウマ	少	少	並
	チャトゲコナジラミ	やや多	—	やや多
イチゴ (育苗期)	うどんこ病	少	少	少
	炭疽病	並	並	並
	ハダニ類	並	並	並

注：果樹共通・チャバネアオカメムシの発生量（現況）の平年比については、年次変動が大きい
ため、前年比としている。

<予想される向こう1か月の天候（平成25年6月22日～7月21日）>

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。降水量は平年より多いでしょう。日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週目は高く、2週目は平年並か高いでしょう。3週目以降は平年並でしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

要素	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20	40	40
降水量	30	30	40
日照時間	30	40	30

（福岡管区气象台 平成25年6月21日発表抜粋）

作物別発生予報

注①：この予報は病害虫防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成しています。

注②：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物：水稲】

普通期水稲

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.0%（平年 0.0%、前年 0.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、

降水量は平年より多いとされている（±）。

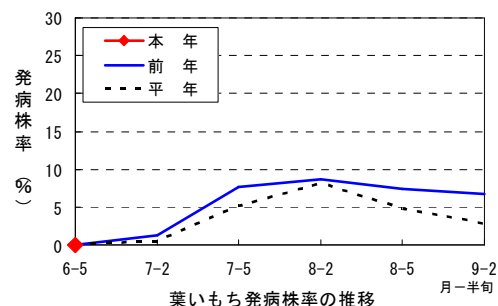
(3) 防除上の注意

ア 補植用の置き苗は本病の発生源となるので、早めに処分する。

イ 箱施薬剤が施用されていない場合は、発生を認めたら薬剤散布を実施する。

ウ 育苗期に苗いもちが多発生した地域では、本田での初期の発生把握と防除に努める。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 縞葉枯病とヒメトビウンカ

(1) 予報の内容

縞葉枯病 : 平年・前年並

ヒメトビウンカ : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

<縞葉枯病>

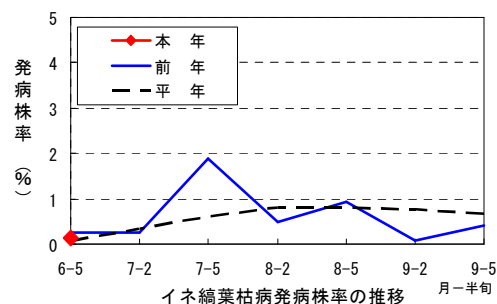
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.14%（平年 0.07%、前年 0.25%）

イ ヒメトビウンカ越冬世代のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、8.4%と平年 7.4%（前年 12.3%）よりやや高かった（平成25年度病害虫発生予察速報第3号参照）（+）。

<ヒメトビウンカ>

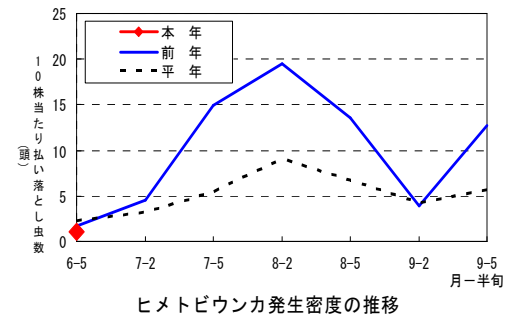
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。



10株当たり成幼虫数 1.0頭（平年 2.2頭、前年 1.7頭）
 イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、
 降水量は平年より多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

- ア 縞葉枯病の発病株を認めたら直ちに除去する。
- イ 移植時期が早い（5月上旬～6月上旬植）ほ場で、ヒメトビウカの発生が多い場合は、効果の高い薬剤で防除を実施する。



3 セジロウンカ

(1) 予報の内容

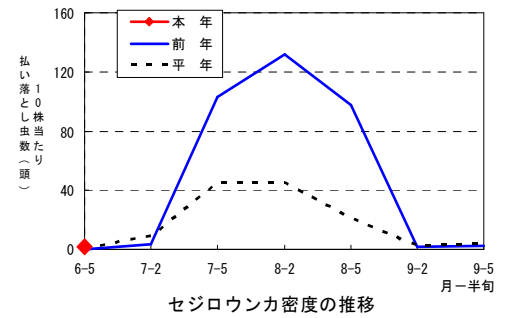
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 5月29日に予察灯(筑後市)で、初飛来を確認した(+)。
- イ 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)
 10株当たり成幼虫数 1.6頭（平年 0.7頭、前年 0.1頭）
- ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、
 降水量は平年より多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

- ア 今後の飛来状況に十分注意する。
- イ 箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。
 また、移植時期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。



4 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

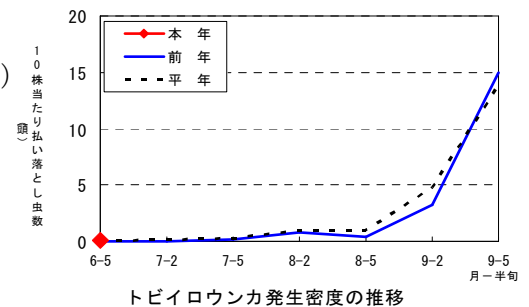
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)
 10株当たり成幼虫数 0.1頭（平年 0.0頭、前年 0.0頭）
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、
 降水量は平年より多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

- ア 今後の飛来状況に十分注意する。
- イ 箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。
 また、移植時期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。
- ウ ほ場内では集中分布するので、ほ場全体の発生状況を把握する。



5 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
 30㎡当たり払い出し成虫数 0.00頭（平年 0.04頭、前年 0.00頭）
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、
 降水量は平年より多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

- ア 今後の飛来状況に十分注意する。
- イ コブノメイガに効果のある箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。
 また、移植時期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病果率 0.0%（平年 0.2%、前年 0%）

発生ほ場率 8.3%（平年 8.5%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、

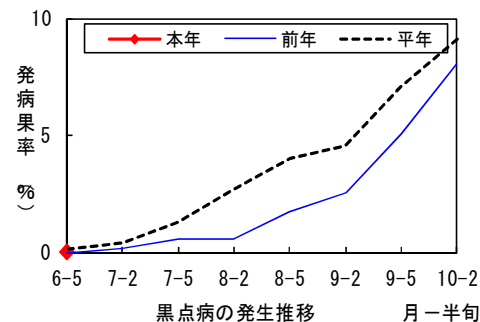
降水量は多いとされている（+）。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出して処分する。

イ 前回の散布から1か月後、又は積算降水量 250 mmを目安に防除を実施する。

ウ 農薬の使用および散布等にあたっては、P13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

寄生葉率 3.9%（平年 21.9%、前年 12.7 %）

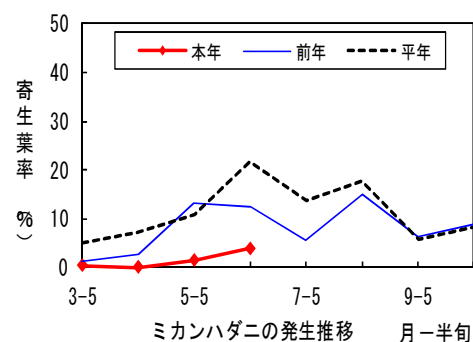
発生ほ場率 33.3%（平年 62.8%、前年 50.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、

降水量は多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

発病葉率 1.3%（平年 1.0%、前年 1.2%）

発生ほ場率 66.7%（平年 49.5%、前年 41.7%）

発病果率 1.2%（平年 0.7%、前年 1.0%）

発生ほ場率 50.0%（平年 25.6%、前年 33.3%）

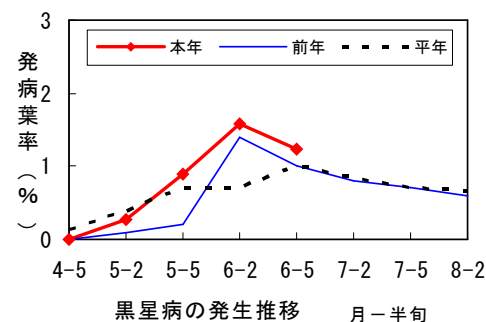
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、

降水量は多いとされている（+）。

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉や罹病果実は、伝染源となるので除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 ナシヒメシクイ

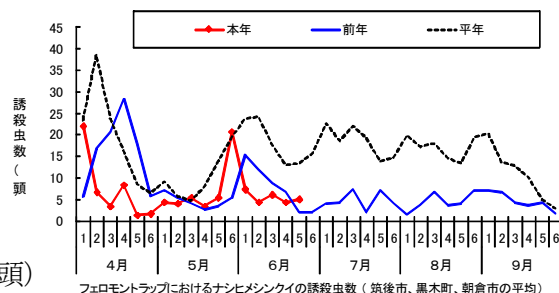
(1) 予報の内容

発生量： 平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 第1世代成虫発生時期である5月4半旬～6月4半旬のフェロモントラップの誘殺虫数は、平年よりやや少なかった（-）。

県内3ヶ所での平均誘殺数 16頭（平年 37頭、前年 17頭）



イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 発蛾最盛期直後を目安に防除を行なうが、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、1回目の防除の7~10日後に追加防除を行う。
- イ 幼虫は主に果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては果実に薬液が十分かかるように散布する。
- ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。

【果樹：ぶどう】

1 ベと病

(1) 予報の内容

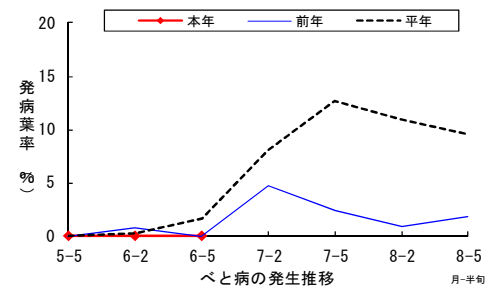
発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(ー)。
発病葉率 0% (平年 1.6%、前年 0%)
発生ほ場率 0% (平年 25.2%、前年 0%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 発病後の防除では効果が低いので、予防散布を徹底する。
- イ 伝染源となる罹病葉は、見つけ次第取り除き、園外に持ち出し処分する。
- ウ ボルドー液は、散布直後に降雨があると薬害が発生するので注意する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

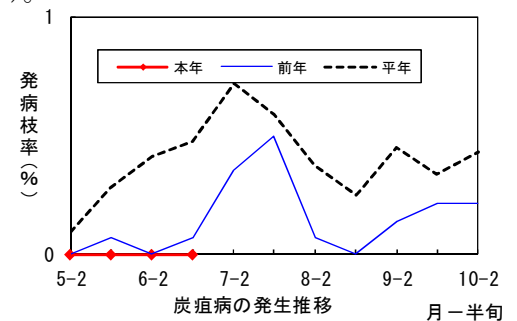
発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(ー)。
発病枝率 0% (平年 0.5%、前年 0.1%)
発生ほ場率 0% (平年 20.7%、前年 7.1%)
発病果率 0.2% (平年 0.0%、前年 0%)
発生ほ場率 1.3% (平年 1.3%、前年 0%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 伝染源となる罹病枝や罹病果実は、見つけ次第取り除き、園外に持ち出し処分する。
- イ 前年発生が多かった園や本病に弱い「早秋」では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

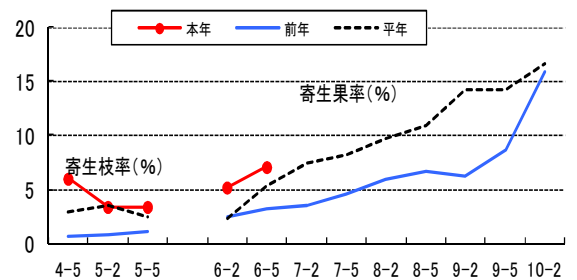
発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)
寄生果率 7.1% (平年 5.4%、前年 3.1%)
発生ほ場率 84.6% (平年 64.9%、前年 35.7%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている(±)

(3) 防除上の注意

- ア 混み合った枝葉を整理し、散布ムラがないように、丁寧に薬剤散布を行う。
- イ 薬剤散布にあたっては、できるだけ天敵類に影響の少ない薬剤を選択する。



フジコナカイガラムシの発生推移 月-半旬

【果樹：いちじく】

1 アザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月1～5半旬までの誘引剤における誘殺虫数は、平年より少なかった（－）。

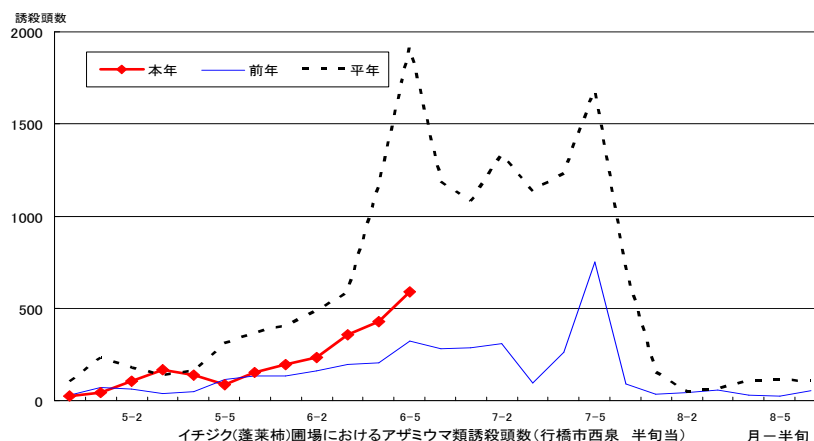
＜調査地点：行橋市西泉＞ 誘殺虫数 1,796頭（平年 4,551頭、前年 1,018頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 園地周辺の7～8月に開花する植物でも増殖するので、ほ場周辺の除草に努める。

イ ほ場で発生が認められたら定期的に薬剤防除を行う。



【果樹：共通】

1 チャバネアオカメムシ

(1) 予報の内容

発生量：前年より少

＜チャバネアオカメムシの年度別発生概況＞

	平成 25 年	平成 24 年	平成 23 年
	本年	前年	前々年(類似年)
越冬量(頭/m ²)	0.7	3.2	0.7
ヒ/球果着生量	中	少	中
発生型	—	7～8月多発	後期

(2) 予報の根拠

ア 6月1半旬～4半旬までの予察灯でのチャバネアオカメムシ誘殺虫数は、前年より少なかった（－：前年比）。

＜調査地点：うきは市浮羽町＞ 誘殺虫数 本年 15頭（前年 24頭、前々年 5頭）

＜調査地点：朝倉市杷木町＞ 誘殺虫数 本年 7頭（前年 146頭、前々年 14頭）

＜調査地点：八女市黒木町＞ 誘殺虫数 本年 26頭（前年 208頭、前々年 51頭）

イ 6月1半旬～4半旬までのフェロモントラップでのチャバネアオカメムシ誘殺虫数は、前年より少なかった。（－：前年比）

＜調査地点：筑紫野市吉木＞ 誘殺虫数 本年 460頭（前年 4,232頭、前々年 520頭）

ウ 6月5半旬調査では、ナシ果実の被害果は認められなかった（－）。

被害果率 0%（前年 0%、前々年 0%）

エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 園内における発生状況の把握に努め、適期防除を行う。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
ナシ ハダニ類	少	少	少	・多発生すると防除が困難になるので、発生の少ない時期の防除を徹底する。
カキ うどんこ病 ハマキムシ類	多 やや少	多 やや少	多 やや少	・葉裏にかかるよう丁寧に散布する。 ・発生が多い園では、8月上～中旬の防除を徹底する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

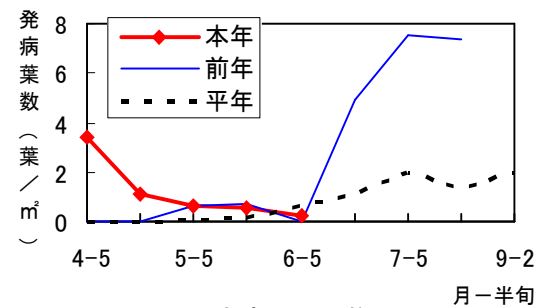
発生量：平年よりやや多、前年より少

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
発病葉数 0.3葉(平年 0.6葉、前年 0葉)
発生ほ場率 35.7%(平年 13.0%、前年 0%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 二番茶摘採後、刈り落とし後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。
- イ 雨滴により孢子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する。(以下の病害虫についても同様)



炭疽病の発生推移

2 もち病

(1) 予報の内容

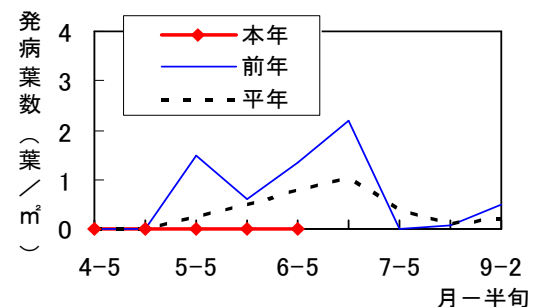
発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。
発病葉数 0葉(平年 0.8葉、前年 1.4葉)
発生ほ場率 0%(平年 13.1%、前年 7.1%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 三番茶を摘採する園では二番茶摘採後、萌芽から1葉期までに防除を行う。
摘採しない園では、秋芽の萌芽から1葉期までに防除を行う。



もち病の発生推移

3 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

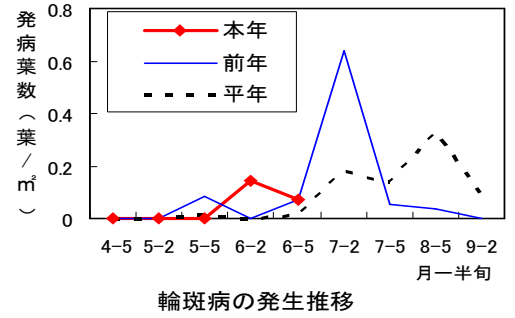
発病葉数 0.07 葉 (平年 0.01 葉、前年 0.07 葉)

発生ほ場率 14.3% (平年 1.1%、前年 7.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている (+)。

(3) 防除上の注意

ア 葉や茎の傷口から病原菌が侵入感染するため、二・三番茶の摘採又は刈り落とし当日か、翌日に防除を行う。



4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少・前年並

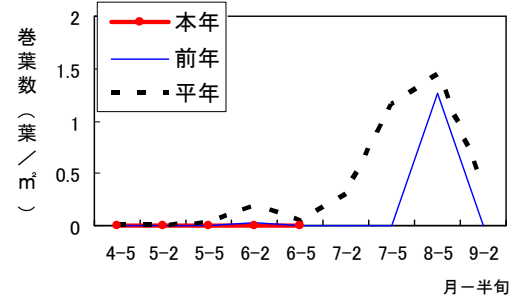
(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった (-)。

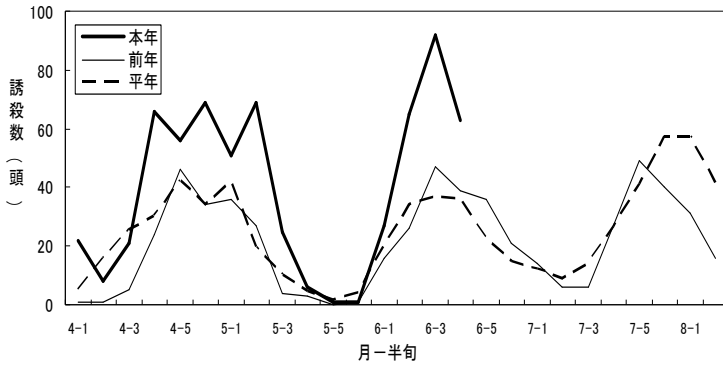
被害葉数 0 葉 (平年 0.04 葉、前年 0 葉)

発生ほ場率 0% (平年 1.8%、前年 0%)

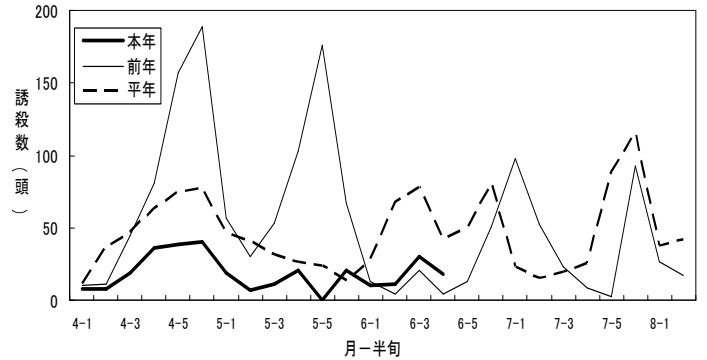
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている (±)。



チャノコカクモンハマキの発生推移



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(筑後市)



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(八女市)

(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月下旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった (-)。

被害葉数 0.2 葉 (平年 1.6 葉、前年 4.0 葉)

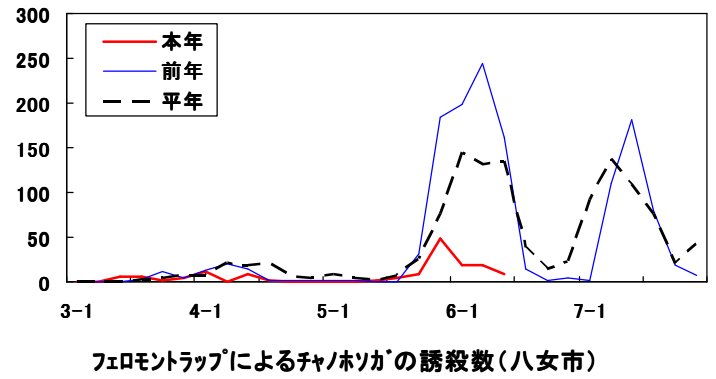
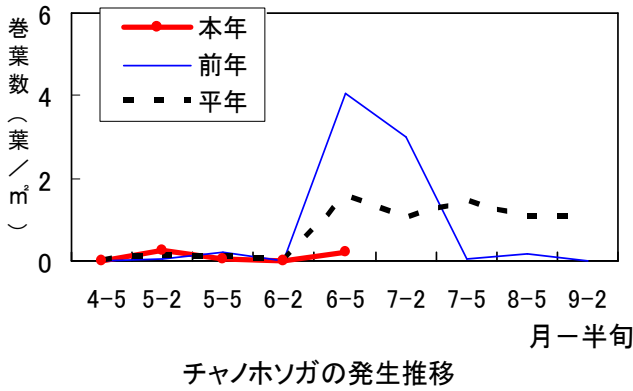
発生ほ場率 21.4% (平年 30.3%、前年 28.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている (±)。

(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月初め頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。



6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

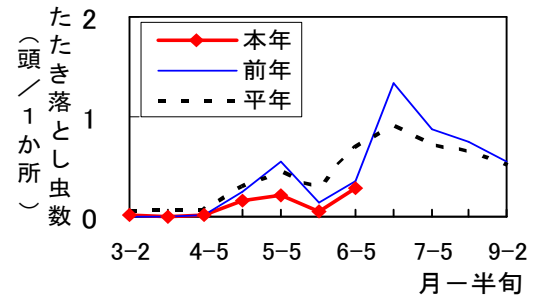
発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(一)。

たたき落とし虫数 0.3頭 (平年 0.7頭、前年 0.4頭)
発生ほ場率 46.2% (平年 45.0%、前年 64.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(一)。



チャノミドリヒメヨコバイの発生推移

※畝の雨落ち部4か所の枝をたたき、紙上に落ちた虫の数を平均。

(3) 防除上の注意

- ア たたき落とし (B5版上) で4頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
- ウ 効果の高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。

7 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

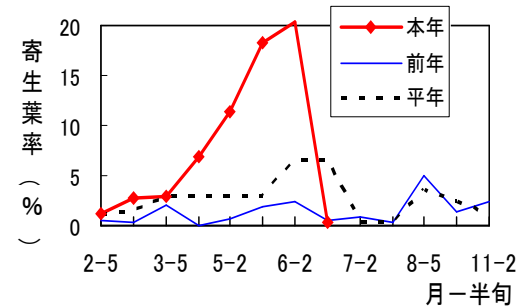
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

寄生葉率 0.3% (平年 6.6%、前年 0.5%)
50葉当たり虫数 0.2頭 (平年 20.4頭、前年 0.4頭)
発生ほ場率 15.4% (平年 31.6%、前年 25.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている(一)。



カンザワハダニの発生推移

(3) 防除上の注意

- ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、摘採後多発する前に速やかに防除を行う。
- イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

8 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

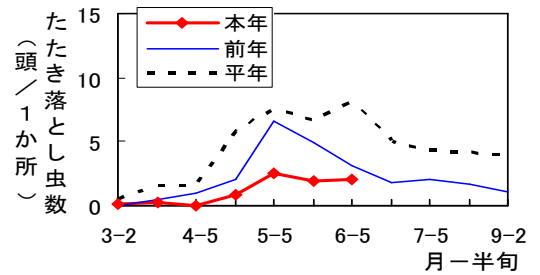
ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

たたき落とし虫数 2.0 頭 (平年 8.1 頭、前年 3.1 頭)
 発生ほ場率 69.2% (平年 92.8%、前年 85.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている (一)。

(3) 防除上の注意

- ア 発生状況に留意し、たたき落とし (B 5 版上) で 10 頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



チャノキイロアザミウマの発生推移

※畝の雨落ち部 4 か所の枝をたたき、紙上に落ちた虫の数を平均。

9 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半月調査の結果、発生量は前年よりやや多かった (+)。

寄生葉率 36.8% (前年 20.5%)

1葉当たり虫数 1.8頭 (前年不明)

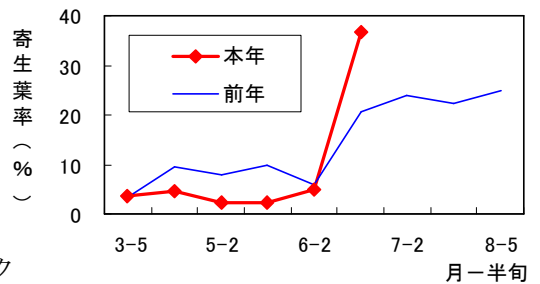
※前年は計数不能な程多発生した園があったため。

発生ほ場率 69.2% (前年 64.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている (±)。

(3) 防除上の注意

- ア チャトゲコナジラミは年3~4回発生を繰り返す。
 防除適期は若齢幼虫発生期であり、親世代成虫の発生ピークが収まった頃であるが、標高によって時期の差が大きい。
 直近の成虫 (第1世代) 発生ピークは、平坦地の早いところで7月上旬頃、山間地の遅いところで8月上旬頃と予想される。
- イ 第1世代成虫は越冬世代成虫に比べて数が少なく、特に、発生初期の茶園では、園を飛翔する成虫の多寡を判断するのが困難である。
 成虫のトラップ誘殺データを基に指導機関が出す技術情報を活用し、防除適期を判断する。
- ウ 幼虫は葉裏に寄生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



チャトゲコナジラミの発生推移

【野菜：イチゴ】

1 うどんこ病 (育苗期)

(1) 予報の内容

発生量：平年 (過去9か年平均) ・前年より少

(2) 予報の根拠

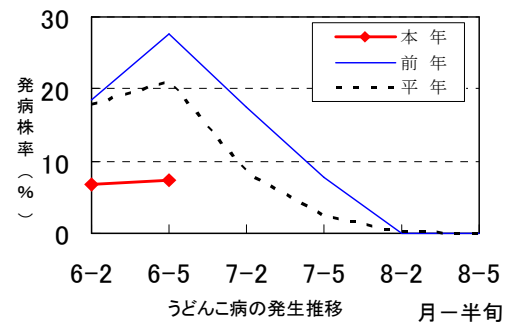
ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった (一)。

発病株率 7.4% (平年 21.0%、前年 27.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年より多いとされている (±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 苗の間隔を空け通風を図る。
- イ 伝染源である罹病葉は摘葉し、薬剤防除を徹底する。
- ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 13 の内容を確認の上、適切に実施する (以下の病害虫についても同様)。



2 炭疽病（育苗期）

(1) 予報の内容

発生量：平年（過去9か年平均）・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0%（平年 0.1%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、

降水量は平年より多いとされている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 高温期の激しい降雨や、過剰なかん水により急速に蔓延するので、

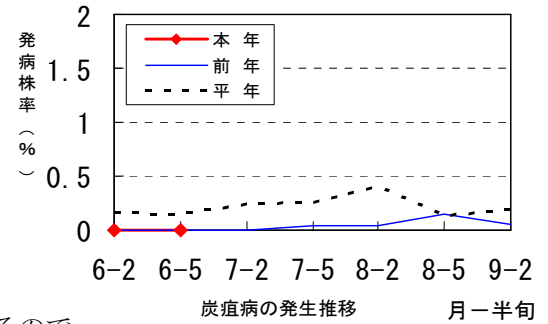
ほ場内での発生状況に注意し、罹病苗及び周辺の苗は、速やかに持ち出し処分する。

イ 雨よけ育苗等で風通しが悪いと、発生しやすいため、苗の間隔を空け、通風を図るとともに、

鉢の土壤水分を適切に保つかん水を行う。

ウ 窒素肥料を多用すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

エ 発病後の薬剤散布は効果が低いので、葉かき作業直後や降雨前後を含め、定期的に予防散布を徹底する。



3 ハダニ類（育苗期）

(1) 予報の内容

発生量：平年（過去9か年平均）・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生株率 7.7%（平年 8.9%、前年 14.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、

降水量は平年より多いとされている（±）。

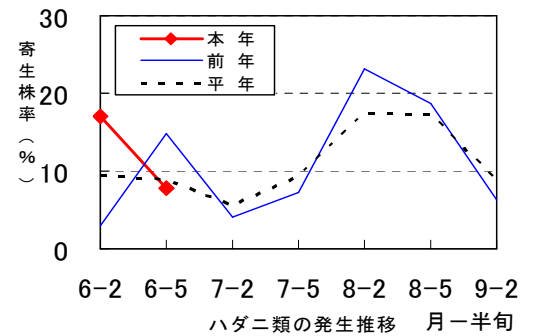
(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

イ ほ場内や周辺の除草を徹底する。

ウ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れ密封し、処分する。

エ 抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用は避ける。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (7月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> 過繁茂にならないように摘葉を行い、ほ場内の通風をよくする。 多発生後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、防除を徹底する。 黄色蛍光灯を利用する場合、日没1時間前～日の出後1時間点灯する。
アザミウマ類	少	少	少	
チョウ目 (ハモンヨトウ・オタバコガ)	並	並	並	

農薬の危害防止に努めましょう ～6月から8月は「農薬安全使用運動」期間です～

福岡県では農薬の使用機会が多い6月から8月を「農薬安全使用運動」の実施期間として定め、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮等について周知しています。

この運動の一環として農薬販売者、農薬使用者及び各種関係団体等を対象に農薬安全使用講習会を7月に県下6か所で開催します。（日程等詳細は病害虫防除所ホームページを参照ください。）

散布者の安全はもちろん、人畜、隣接作物、河川等への配慮についてご指導よろしくをお願いします。

なお、平成23年2月4日付けの「農林水産省消費安全局長、環境省水・大気環境局長通知」により、**農薬として「ツバキ油粕」等を使用することは禁止されています**ので、併せてご指導よろしくをお願いします。

農薬安全使用運動重点啓発事項

- ① 農薬ラベル確認の徹底
(適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数・有用生物（みつばち等への影響)
- ② 散布前における情報提供の実施
(散布区域に近接するほ場、住宅地、養蜂等の関係者、他)
- ③ 散布時には近隣作物や住宅地等周辺への飛散防止を徹底
 - ・風、散布方向、散布時間、散布圧に留意
 - ・飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用
 - ・散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意
- ④ 水田除草剤や本田粒剤は、使用後7日間の止水を遵守
 - ・落水・かけ流しをしない。
- ⑤ 散布後は必ず散布器具（タンク、ホース等）を3回洗浄
- ⑥ 防除履歴の正確な記帳
 - ・薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳

福岡県病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/>

電子メール byougaichuboujyo@pref.fukuoka.lg.jp